慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白石孝 土屋六郎編 国際協力と日本経済
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.7 (1965. 7) ,p.690(90)- 691(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19650701-0091
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650701-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

発展はきわめて緩慢であった。ただ、都市においては、荘園年貢の余剰が個別的に散在する市場を通じて流通したが、農民と市場との結びつきはなく、都市市場で取引きされる工芸品にしても、むしろ高級品が主で、その生産と消費の過程も、農村市場を媒介としていなかったのである。

他方、南北朝期以後の後期にあっては、名主経営が解体して、「百姓」層による小経営に生産の基軸が移り、荘園領主に代って在地領主による地域的農民支配＝農奴制が広汎に展開し、それによって荘園領主制や、それに密着する流通のメカニズムも変質・解体する。それに代って、農業生産力の発展に支えられた地方における分業と交換の発展、さらにはそれに伴う貨幣流通の拡大がみられる。畿内を中心とした先進地と、後進地との経済的発展の地域差が明確になって来るのもこの時期である。座商人を通じてであれ、中央地帯の農民は商品交換関係にまきこまれ、また、それに伴って地方経済の封鎖性は解体し始める。ただこの際、地方における商品流通の進展においては、中央地帯におけるそれと異なって、市場と接触を持つようになる農民階層が限定されていたことは注意しなければならない。領主層もこの期には、前期とは異なって領内の経済的発展に関心を持ち、典型的には戦国大名にみられる如く、また、戦国大名を俟たずとも、在地領主層によって示される如く、農業生産の安定と農民保護に関する対策がみられるのである。

以上のように「中世」をとらえる基軸に沿って第一章以下の各論が展開されている。ここでは、特に個々に紹介することはできないが、第二章においては、中世の農村と農民経営の発展が生き生きとした表現によって描かれている。また第三章では、中世の商品流通を、農村史或いは荘園史の研究諸成果とからませつつ、その重層的・求心的・特権的性格が明らかにされている。従来、独立的に取り扱われがちであったこの分野の研究を正しい路線にのせようとする著者の意図を窺いえよう。第四章では、室町幕府経済という重要にして研究困難な、従って業績の甚だ少ない問題に光をあてたものであるが、特にここでは「料所」＝幕府直轄領経営がとり上げられている。第五章では、中世と近世との橋渡しをなす戦国大名が対象となり、大名権力の収取体系、直轄領の存在形態、領域経済圏の構造、農民闘争、城下町の創設といった諸特徴が論じられている。第六章は、主として対中国大陸関係であるが、特に明帝国成立期の室町幕府を、国際関係という視野から論じた一節は興味深い問題を提供している。

総じて本書は、概説書・入門書ではなく、それぞれの専門家による高度の専門論文からなって居り、読むに際してはそれなりの覚悟は必要である。ただ、経済史といっても、ここでは社会構成史的視角が貫かれている。一つだけ望むところがあるとすれば、前後の時代、すなわち、古代および近世との連続（又は非連続）についてで、広い視野からの提言がなされて然るべきではなかったろうか。

（東京大学出版会・A5・三二三頁・九〇〇円）

—速水　融—

＊　＊　＊

九〇　（六九〇）

白石　孝
土屋六郎　編

『国際協力と日本経済』

本書の意味・内容は、非常に明確に、短いはしがきに要約されている。すなわち、「わが国の高度成長は今やひとつの転期に達した。……　また開放体制への移行は、きびしい国際環境をまえにして、わが国経済の体質改善を強く求めつつある。われわれの共通の関心も、まさにこうしたわが国の現状に対して、われわれの進むべき道とそこに横たわる諸問題を明らかにし、新しい今後のビジョンを確立するところにあるといいうるであろう。」

かかる課題を、本書では、日本と世界との接点の集約的表現である国際収支、貿易構造に中心をおき、理論的・実証的分析の双方から、しかも広い視野に立ってとらえ、十分なる解明を行ない、政策的方向づけを与えている。

まず、総論「世界経済の動向と日本経済の政策的課題」（赤松要教授）で、わが国の国際的環境に目をむけ、長期的な世界経済の展開とその論理が明らかにされ、その中での日本のとるべき方向・政策的課題が明示されている。とくにこの論文は、赤松要教授が最近刊行された名著『世界経済論』（国元書房）のエッセンスともいうべきもので注目に値し、一つの大きなパースペクティブが与えられるのである。

第一部「国際収支の分析とその対策」では、わが国の国際収支の短期的循環および経済成長との関連が、実証的・理論的に分析されている。ここには三つの論文がかかげられているが、「景気変動、引締政策および国際収支」と題してとくに経済活動水準と国際流動性準備とのフィードバック・システムに重点を置いて実証分析を行なった渡部福太郎教授の論文、「高度成長と国際収支」に関し、日本の高度成長が国際収支の大幅な赤字をもたらさなかったのは何故かを、所得効果・価格効果・偏向成長効果から究明している土屋六郎教授の論文、「開放体制下における国際収支対策」を基本的・長期的に国内需給ギャップすなわち国内成長余力あるいは産出供給力の増強よりとらえ、モデル的・統計的に分析した海老沢道進氏の論文のいずれもが、興味ある注目さるべきものである。

第二部では、国際収支の構成項目のうちでも中心的な貿易収支がとりあげられ、「貿易構造の分析とその対策」が考察されている。

まず白石孝教授が、世界および日本の貿易構造の変化、国際市場構造の変化を実証的に解明し、わが国の輸出構造高度化の目標を明示される。ついで丸茂明則氏が、戦後におけるわが国の貿易構造の特徴＝中進国的貿易構造を明らかにするとともに、それからの脱皮がどのように行なわれつつあるか、それがわが国の輸出入の将来にどう影響するかを考察している。さらに藤井茂教授が、より本質的な意味において貿易政策をとらえ、「貿易構造政策の体系と課題」を、対内的、対外的貿易構造政策の二つの方向から、日本経済の発展を対象に、興味ある究明をなされている。

第三部「国際経済協力と日本経済」では、一部・二部での日本に着目しての考察から、視野をやや拡大し、世界の中での日本をとらえ長期的・本質的意味では、世界経済の調和的発展なくしては日本経済の発展もありえないことから、国際金融面（鈴木浩次氏）と国際貿易面（片山謙二教授）における国際経済協力が分析されており、とくにその中でわが国の地位と果すべき役割が追究されている。

さらに補論として、白石教授による「国際経済の動向とその理論」がつけ加えられている。国際経済学が古典派以来 Political Economy の伝統をもち、現実的諸問題に解答することを主要課題としてきたとすれば、十分なる現実的政策論議を行なうためにも、国際経済学の潮流、これ迄の展開の理解が必要とされよう。この意味で、この補論は不可欠のものであり、短かいものではあるが、すばらしい展望となっている。

最後に基本文献案内として、今後の研究のための文献紹介・解題がなされており、非常に便利である。

かように本書は、講座現代の経済政策の第四巻として、緊急かつ重要な問題を、非常にバランスのとれた構成、すぐれた執筆者をもって、解明しつくしたものであり、転期に立つわが国経済の政策的課題にひとつの重要な指針を与えるものと思われ、かかる問題に関心あるすべての人々に一読をおすすめしたい。

日本経済の転換期論、開放体制、自由化への移行、国際協力の要請といった問題について、ただレッテルだけにおどらされることなく、その本質的意味・内容を理解し、周到なる理論的、実証的分析にもとづき、今後の方向、とるべき施策が考慮さるべきであり、かかる反省に本書が役立つことを期待してやまない。（中央経済社・昭和四〇年五月刊・二四八頁・七三〇円）

—深海博明—

＊　＊　＊